



堀江秀史 著

「寺山修司のテレビメディア認識

～NHK アーカイブス発掘資料『一匹』（1963）を中心に～

（日本映像学会『映像学』86号（2011）所収）

メディア研究部 原 由美子

本欄では、NHKが平成21年度から始めた「NHKアーカイブスの学術利用に向けたトライアル研究」の成果を紹介していく。この試みの中で、すでに28件の研究が採択され、研究論文等の成果が出始めた。これまでに採択された研究は、メディア研究だけでなく、文学、言語学、医療、建築など多岐にわたっている。アーカイブスを利用してどのような研究成果が得られているのかを紹介することが、研究成果のさらなる多角的な展開や、番組を利用した研究の可能性の拡大につながることを期待している。

トライアル研究とは

NHKアーカイブスには、77万本の番組、545万項目のニュースが保存されており（保存数は23年度末時点）、メディア関係の研究者から、この膨大な放送資産を研究に役立てたいという要望が、以前から寄せられていた。そこで、アーカイブス資産の社会還元を進め、こうした要望にこたえること、さらにそれによって保存された番組コンテンツから新たな価値創出につながることを期待し、学術研究に限定した“試行”を始めることにした。研究者による実行委員会を組織して具体的な条件等を検討し、平成21年11月から研究の公募を始めた。

第1期（募集期間平成21年11月～12月）では5件、第2期（平成21年11月～22年3月）では11件、第3期（平成23年2月～6月）では7件の研究が採択された。平成22年10月には「関西トライアル」として別途研究を募集し（平成22年10月～12月）、5件の研究が採択された。

平成23年度末に、これまでのトライアル研究における成果や課題、運営上の改善点等を検討し、平成24年度からは第2段階として「トライアル研究Ⅱ」「関西トライアルⅡ」を開始している（募集期間平成24年5月～7月）。

トライアル研究の仕組み

このトライアル研究では、研究の目的を学術利用に限定している。そのため、応募者の条件として①大学または公的研究所に所属する教員・研究者、②大学院生で必要な条件を満たす人、またはその人を代表とするグループと定めている。

応募者は、トライアル研究ホームページに掲載された「募集要項」や「コンテンツの種類・閲覧方法」を参照し、ホームページから応募用紙をダウンロードして記入のうえ、応募する。

応募にあたっては、事前説明の機会を設け、希望する番組コンテンツが保存されているか、閲覧期間はどのくらい必要かなどの確認・相談をすることができる。

募集締め切り後、実行委員会を開催し、応募書類の書面審査（研究のテーマ・内容、研究方法・計画、対象コンテンツの選定など）によって1次選考通過者を決める。審査にあたっては①研究の実現可能性、有効性、②研究の新規性、③NHKアーカイブス利用の妥当性、④学術的基礎の十分性（信頼性）を基準とした。第1次選考を通過した研究者は、川口のNHKアーカイブスあるいは大阪放送局で、閲覧希望コンテンツの確認を行い、この結果を受けて実行委員会が採択研究を最終決定する。

著作権の関係上、番組閲覧はNHKの局舎内に限られ、閲覧した番組のコピーなどを持ち出すことはできない。そのため、川口のNHKアーカイブスと大阪放送局に設けられた閲覧室を効率的に利用する必要があり、研究者と事務局の調整のうえで、閲覧スケジュールを決めて閲覧を行っている。

閲覧後の論文執筆等について期限は設けていないが、あらかじめ、いつ頃どのような媒体に発表する予定か、応募の時点で書面に記入してもらうことになっている。

トライアル研究第2段階

最初にも述べたとおり、この研究のねらいは、長年NHKで制作・放送されてきた番組コンテンツを、学術研究利用に供することで社会還元すること、それによって、さらに番組コンテンツが新たな価値を生み出すことにある。このため、今年度から始まる「トライアル研究Ⅱ」では、研究の審査にあたっては、先にあげた4つの審査基準に加え、「アウトプット展開の発信力と可能性」も、選考基準として加えることとなった。

実行委員会のメンバーは、さまざまな分野の研究者で構成されている。第1段階では、メディア研究者を中心に、教育や認知情報科学、コミュニケーションデザイン、まんが・アニメ学などを専門とする研究者で構成した。今年度からの「トライアル研究Ⅱ」では、半数程度のメンバーに引き続き委員を委嘱すると同時に、連想情報学やメディア芸術などの分野を専門とする委員に加わっていただいたほか、事務局を務めるNHKライツアーカイブセンターと放送文化研究所からも1名ずつ委員として参加することとした。今期の委員（外部）は、以下のとおりである。

座長：吉見俊哉 東京大学副学長
副座長：音 好宏 上智大学教授
委員：石田佐恵子 大阪市立大学教授
伊藤 守 早稲田大学教授
高野明彦 国立情報学研究所教授
美馬のゆり 公立はこだて未来大学教授
吉岡 洋 京都大学教授

本欄では、今号から年に3～4回程度のペースで、アーカイブス利用研究の成果として発表された論文を紹介していく。

なお、NHKアーカイブス学術利用（「トライアル研究Ⅱ」「関西トライアルⅡ」）の詳細については、<http://www.nhk.or.jp/archives/academic/>をご参照いただきたい。

最初に紹介するのは、第1期研究に採択された堀江秀史氏（東京大学大学院）の論文、「寺山修司のテレビメディア認識～NHKアーカイブス発掘資料『一匹』（1963）を中心に～」である。この論文は、日本映像学会の発行する『映像学』86号（2011年5月刊行）に掲載された。

本論文は、以下の6つのパートから成り立っている。

1. 本論の目的と構成
2. 放送と寺山修司に関する従来研究
3. NHKアーカイブスの意義—映り込む効能
4. 寺山修司の生前におけるテレビとの関わり
5. 映像表現と言語表現—『一匹』にみる芸術ジャンルの特性
6. おわりに

論文のタイトルからもわかるように、この論文の中心は第5章にある。この章で、堀江氏は、1963年に放送されたテレビドラマ（脚本：寺山修司、演出：和田勉）について、とくにそのラストシーンが、放送されたドラマと、のちに活字化された脚本とで異なることを発見し、その意味を考察している。

第5章の構成は、以下のとおり。

- 5-1 ドラマ概要
- 5-2 二つ目のラストシーン
- 5-3 「コマーシャルズム」への抵抗か？
- 5-4 主題による形式の選択
- 5-5 放送ジャンルの特性
- 5-6 『寺山修司の戯曲』（思潮社）について、あるいは生活と芸術

この『一匹』というドラマは、寺山修司脚本によるテレビドラマとしては最も古いもので、番組ライブラリーでの公開はされていない。演出を担当した和田勉氏の著作のなかに、このドラマのラストシーンには「夢バージョン」と「現実バージョン」があることが記録されている。しかし、寺山が出版物に残したのは「現実バージョン」の方のみで、「夢バージョン」の内容を知る手だてはなかったという。堀江氏は、今回の研究の機会を得て初めて「夢バージョン」を見ることができたわけである。

ドラマの概要は、以下のとおりである。

少年が幼い頃から自宅で飼っていた牛の太郎が、ある日いなくなる。太郎が東京に出荷されたことを知った少年は、太郎を追って上京する。さまざまな曲折を経て少年は、精肉となった太郎のいる場所にたどり着く。肉塊がつるされた冷蔵施設の中で、少年は疲れ果てて眠りに落ちる。その後のラストシーンが、「夢バージョン」と「現実バージョン」で異なっている。「夢」では、少年が目覚め、太郎が食肉となったことを受け止めて歩き出す。一方、「現実」では、少年は眠りからさめないままに終わる。

放送された「夢バージョン」は、「少年は、太郎がみんなのものになったことをしった」というメッセージで終わる。堀江氏は、この放送されたバージョンを、少年が「自分のもの、あるいは自分の一部ですらあった太郎を、社会へと還元しなければならないことを悟るまでの、大人になるまでの道のりの物語」と解釈し、さらにラストシーンが一種の狂気をはらんだ描写となって

いることから、「…世界に対して『大人』としての日本を打ち出していく、社会の流れを暗喩したものと捉えることが可能」だとしている。

一方で、ドラマ放送直後に刊行された『シナリオ』誌1963年3月号に掲載された脚本のラストシーンでは、冷蔵施設の中で眠る少年が目覚めることはない。「少年は少年のまま凍結して、それを朝日が照らし出す」という終わり方である。

このような違いがある場合、放送されたバージョンが気に入らずに出版用に書きなおしたのではないかと推測も可能である。しかし、当時の寺山や和田の著作や対談をみると、寺山と和田の合意のうえで、放送には「夢バージョン」が採用されたことがわかったと堀江氏は述べている。そのうえで、寺山自身の著作物としては、放送とは異なる「現実バージョン」を採ったというのである。そして、まさにその点こそ、寺山がテレビ放送と、詩集などの個人作品集を、メディア特性を認識したうえで意図的に分けていたことの証左となるのだとみる。

この作品のあとの寺山の創作活動の展開について、堀江氏は以下のようにまとめている。「…この後の活動において、寺山は、言語表現が映像表現か、あるいは個人＝内面を表現するのか社会＝外面を表現するのか、そのどちらかを選ぶのではなく、その両方を、ジャンルの、メディア的特性を見据えたうえで、実践していった。明確なジャンルに対する認識があったからこそ、寺山作品はそれぞれ個々に完結することなく有機的に結びついているのであり、われわ

れが活動の総体の中で作品を把握しようとする時、初めてその企てが見えてくるような小宇宙を構成し得ているのである。そうした認識にたつてこそ、寺山芸術の価値、寺山のジャンル論、メディア論の価値が見えてくると云えるだろう」。

こうした認識に立てば、寺山修司の表現活動を研究する者にとって、その重要な一角を占めるテレビというメディアにおける作品群を研究対象とする作業は不可欠と言わざるを得ないだろう。しかし、これまでそれは不可能であった。

放送分野でも、ラジオ作品については、シナリオとして公刊されたり、ドラマCDとして発売されたりして、それなりに研究が進んでいたという。だが、テレビ作品については、寺山が関わったテレビのドラマ、ドキュメンタリーが、NHK、民放あわせて30本以上あることが確認されながらも、それらが保存されているかどうかさえわからない状況だということである。

そうした中で今回、少なくともNHKにはどのような番組がどのような形で残っているかが明らかになり、また研究者の目に触れることもできた。それを見ることによって、寺山のメディア認識の具体例が確認できたのである。

本研究は、アーカイブス利用研究の有効性や意義が、極めてわかりやすい形で示された一例といえるだろう。

(はら ゆみこ)